

「牧師室」(2016年1月17日)

ドイツのマルティン・ルターと並んで、宗教改革者として忘れることができないスイスのヨハネス・カルヴィンが遺した「遺言書」があると言われていました。彼の死の数日前に書かれたものです。

「主よ、わたしはあなたに感謝します。主が被造物の一人であるわたしに目を留め、同情し、あらゆる偶像の深淵からわたしを引き上げ、福音の光へと導いて下さり、わたしを幸いな教えに与らせてくれました。わたしには、その価値がないにもかかわらずです。主は更にわたしに主の憐みを示して下さい、あらゆる欠点や弱さを持っているわたしを、本来ならば、そのために、わたしは主から数え切れないほど度々見捨てられても良い人間ですが、主は、それをなさいませんでした。ですからわたしには、主がわたしを恵みによって受け入れて下さった、この信仰とこの希望・信頼の他に、生きるにも、死ぬにも、頼るべきものは何もないことを、今宣言します」。

実にカルヴィンは、この信仰を持ちつつ、生涯休む暇もなく働き、活動したのです。何故なら、そのような信仰を持っている人にとって「退屈である」と言うことはあり得ず、いつも矍鑠(かくしゃく)としていたのです(友人のエバハルト・ブッシュの文章から引用)。